師匠と一夜

ワンナイト・ホラー　2

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=18805849

R-18, モ腐サイコ100, 霊幻総受け, モブ霊, 芹霊, エク霊, もぶお兄さん×霊幻, 続きを全裸待機, ♡喘ぎ, モ腐サイコ小説50users入り

ワンナイトしまくってる師匠が相談所のメンツにバレて泥沼化する話の２話目です。モブお兄さんが出張りますが、敗北前提なのでご了承ください。なお攻めの倫理観がアレとなっております。お好きな方はよろしくお付き合いください。

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

ワンナイト・ホラー　２

逃げた。
俺はとりあえず、芹沢から逃げた。夜中に痴情のもつれで長話なんてゴメンだ。
そうやって芹沢からとりあえず逃げた翌朝。
芹沢からの鬼電を無視しつつ、みーくんと待ち合わせて、役所に向かう。
相談所は午後から開けることにした。時間がかかるかもしれないしな。芹沢にメールを送っておく。
役所の受付で事情を話すと、市民相談課に案内された。
「事情が事情ですので、担当の相談員を付けさせていただきますね。私が長谷川さんの担当になります、松上です」
仕事の出来そうな中年女性が険しい顔をしてみーくんに話しかける。
「よろしくね、おねえさん！」
「ええ」
さっきからみーくんのハイテンションがスベり続けている。こういう場に慣れていないのだ。
「彼には男性を余り近づけないでください。トラウマがありますので」
「えー、大丈夫だって」
「委細承知いたしました」
へらへら強がってみせるみーくんに、淡々と正しい対応をする役所の松上さん。この人はなかなかアタリの役人かもしれないな。
「彼のことで何かあれば、私に連絡くださって構いません。彼の母親はネグレクトの上にアルコール中毒ですので、責任能力に不安があります」
相談所の名刺を差し出すと、めちゃくちゃ顔を顰める松上さん。
うん、正しい反応だ。
「……あなたは？」
「何でも屋みたいなことをしておりまして、彼に夜間中学などにつ

いて相談を受けたのです。ですので仕事で付き添いさせていただいています」
なるほど、と納得した松上さん。ふう、なんとか誤魔化せたな。
「長谷川さんが受けることのできるサポートは色々ありますが、まずは生活保護を申請してもらいます」
松上さんが色々と書類を出してくる。
「学業に集中してもらうには生活の保護が最優先です」
ずい、と松上さんが顔を近づけてくる。
「売春はそもそも法的にグレーです。それに、危険も多い。生活保護を受けて、すぐに売春は止めてください」
ひそひそと言う松上さん。うん、この人は信用できるな。
手帳に松上さんの名前と所属をメモしておく。この担当さんは手放しちゃダメだ。
「え……でも、生活保護なんて、かあちゃんがなんて言うか……」
「失礼ですが、お母さんは何のお仕事を？」
「……今は俺の稼ぎで暮らしてる。でも昔は学校の先生をやってて、立派な人なんだ」
「長谷川さん。まずはあなたが助かることを考えましょう」
淡々とした松上さんが頼もしい。でもみーくんは不安なのか、俺の手をぎゅっと握ってきたので、強く握り返す。大丈夫だ。大丈夫だぞ。
「親子関係の調停委員に入ってもらいます。お母さんのことは私たち役所に任せてください。長谷川さんは今日からシェルターに入って、生活保護を受けてください。お母さんには会わないように。事情が事情です。児童相談所にも場合によっては動いて貰うので、安心してください」
「各担当者のお名前をお聞きしてもいいですか」
松上さんは俺たちの繋いだ手を見る。
「……分かりました」
「ねえ霊幻さん、俺どうなるの？どういうこと？」
不安そうにみーくんが俺の顔を覗き込んでくる。
「行政の手がやっと届いたんだよ、みーくん。使えるサービスは使わなきゃ。暮らすお金も住むところも、国が用意してくれる。そこ

から、みーくんは学校に通うんだ」
「話がうますぎるよ！騙されてんじゃねぇの？」
「いいや？いいか、みーくん。そうやってみーくんが学校に行って、卒業して、ちゃんと働き出したら、税金を払うようになる。そこでお金が回収されるんだ。大丈夫。辻褄の合う話だよ」
みーくんが痛いほどに手を握ってくる。
「……かあちゃんに会っちゃダメ、ってどういうことだよ……」
子供にウリさせて酒を飲む母親に、この敏腕役人の松上さんが付け入る隙を与えるワケが無い。母親と一緒に暮らしたままだと、生活保護費を奪われたり、売春を強要されて学校に通えなくなったりすることが容易に想像できる。
「お母さんは病気なんだ。心の病気だ。みーくんがいると、みーくんに甘えて治りが遅くなる。だから、治るまでは会っちゃダメなんだ」
「……うそだ」
ポロポロと涙をこぼし始めたみーくんにぎょっとする。
「かあちゃん、悪いことしてねぇよ。ちゃんとごはん出してくれるもん。かあちゃん、悪くない」
……この優しいみーくんの愛を、母親はどれほど搾取してきたのだろうか。
「みーくん、約束どおりお母さんにも俺が会いに行くから。役所の人も、お母さんをいじめるためにそんなこと言ってるわけじゃないから、な？ちょっと、俺にまかせてくれ」
乗り掛かったふねだが、出航先が泥沼だな。まあいい。相談所でもたまにこういう事態には遭遇する。慣れっこだ。
「霊幻さん、お母さんの支援もしてらっしゃるのですか？」
「……ええ。相談の予約を受けております」
「……………………そうですか」
デリケートで複雑な話だ。役人よりも、俺みたいな占い師まがいみたいな人間を信用する人もいる。
アル中で無職の母親を、役所に連れてくるのも、通院させるのも至難の技だが、案外俺みたいな職種の民間人が間に入るとスッと顔を出したりする。それをこのベテラン相談員の女性は分かっているの

だろう。
「もしお母さんも連れてくることができたら、私を指名して呼んでください。必ず」
「分かりました」
役人にしては珍しく、名刺を渡してくる松上さん。それほどみーくんの状況は悪いということだろう。
と、同時に、希望も持てる状態ということだ。みーくんは勉強こそ出来る環境になかったが、頭はいいし、素直だ。学習意欲もある。
役所としてはなんとしても支援の成功例にしたいだろうな。
「では、こちらの書類に名前と住所をご記入ください」
「……れーげんさん、俺、名前と住所、書けない」
松上さんが息を呑む。
「家に届いてたおばあちゃんからの年賀状持ってこいって言ってただろ？」
「……うん」
「それ見ながら書くんだ」
「……漢字が難しくて」
「難しくても、ひとつひとつ、真似しながら書くんだ。大丈夫だ。俺も一緒にしてやるから」
「……うん」
みーくんがぎこちなく長谷川、と書く横で、俺も相談所のチラシの裏に同じように漢字を書いて見せる。
美築（みつき）、という名前も書けないみーくんに、胸が苦しくなってくる。
これで母親が元国語教諭だというのが、余計につらい。
「霊幻さん、これ何て読むの」
「あじたまけん、だ」
「味玉ってこう書くんだ、へぇ……」
松上さんも辛そうな顔をしている。
「俺、漢字分かってきたかも」
当のみーくんが少し嬉しそうに字を書いているのが、救いだった。

※

「霊幻さん、今晩も逢える？」
「……みーくん。俺とはもうそういうのは、止めにしよう」
みーくんは周りから強制的に男性と関係を持つように仕向けられてきた。もしかするとそもそも女性にしか興味が無い青年なのかもしれない。
俺の性欲処理に、付き合わせるわけにはいかない。
「みーくんはイケメンなんだ。これからは彼女を作ることもできるんだぞ」
「えー、俺、恋人にすんなら霊幻さんがいいんだけど」
「そういうリップサービスはいいから」
「……本気だよ」
真面目に見つめてくるみーくんにドキっとする。
「みーくん……」
「なんてね。割り切りで、付き合うとか言い出さない、って約束だもんね。冗談だよ、霊幻さん」
へらりと笑うみーくんにホッと肩の力が抜ける。
「でもさ」
ぐいっと腕を引かれる。
「お互いの性欲処理、しようよ」
よろけた耳元で言われて、ゾクっとしてしまう。
「……っ、ダメだろ、」
みーくんから身体を離そうとして。
逆方向に、ものすごい力で引っ張られた。
「いっ……」
腕を引っ張られた方を見て、目を見開く。
「師匠にさわるな」
モブが。
これまで聞いた事のないような冷たい声で、みーくんに吐き捨てた。
「モブ！？なんでここに……大学は！？」
「新隆さん、そいつ知り合い？」
挑発的なみーくんの言い方にモブの眉がピクリと上がる。

「僕は──」
「俺の弟子だ。モブ、依頼人の長谷川さんだ」
いらいにん、と納得していない声でモブが言う。
「なんだ、ただの弟子か」
またモブの眉がピクピク歪む。
同じ年のみーくんとモブは、どうも相性が悪いみたいだ。
「アンタこそ、そんなに力込めて霊幻さんの腕を握るなよ。綺麗な肌に跡が残るだろ」
「……！！」
腕を掴む力が緩んで、あからさまにモブの機嫌が悪くなる。
「じゃあね、霊幻さん、また今夜」
……最悪の捨て台詞を残してみーくんが相談員の方に去っていく。
「師匠、相談所に戻りましょう」
わー、モブくん、そんな低い声出せるんだー。
「芹沢さんも、エクボも、待ってます」
わー、帰りたくねぇ。

モブも含めて。

振った男たちが、勢揃いである。

※

所長の椅子にちょこんと座った俺は。
右にモブ、左に芹沢、前にエクボが立っていて、後ろは窓で、絶体絶命だった。
「水臭いじゃねぇか、霊幻。彼氏がいるなら俺たちに教えてくれたら良かっただろ？」
エクボがやたらと優しい声を出す。怖い。
エクボ。ブサカワの相談所のマスコット悪霊。今はコワモテのお兄さんに憑依してる。なんだかんだ優しい世話焼き。
……半年前に告白されて、お断りした。
「男に興味が無いなんて嘘だったんですね。イケメンならいいって

事だったんですか？」
芹沢克也。相談所の大黒柱。強力な超能力者で、ちょっと天然入ってるが優しくていい奴。夜間高校に通う真面目な頑張り屋。
……１週間前に告白されて、お断りした。
「彼氏なら紹介してくださいよ」
こここここ怖いってモブ！！お前のそんな声ほんと師匠初耳！！
モブ……影山茂夫。可愛い俺の弟子。最強の超能力者で大学生。背が高くなってスタイルも良くなって、俺の自慢の弟子。素朴で優しい、いい子。
……通算５回告白され、通算５回お断りしている。
「……彼氏だっつったらお前ら納得すんの？」
霊幻新隆。絶賛消えて無くなりたいクズ人間。マジで価値が無いんだよ俺ぁよ。お前らとは違うんだ。
「恋愛する気がないから、っつってフラれた身としては、到底納得できねぇなぁ」
にこりと笑って優しい声で言うエクボが怖い。
「男が恋愛対象じゃない、って言われた方も納得できないです」
芹沢はもう、単純に怖い。怒ってるのがよく分かる。
「子供だから、って断られた僕も、納得いきませんね」
みーくんと同じ年だもんな……モブはそりゃあ納得いかねぇよな……。
「みーくんとはなんでもねぇよ。ただの依頼人だ」
「「「みーくん？」」」
あ、やべ。
「ただの依頼人を愛称で呼ぶんですか、アンタは」
モブのこめかみに青筋が浮いて見える。
「依頼人とホテルから出てきて、キスまでして、何してたんですか」
あー芹沢〜、見てたか、芹沢〜！
「なぁ霊幻。ホントのことを言った方がいいんじゃねぇかぁ？このままじゃ俺たち、嫉妬でお前を『どうにか』しちまいそうだよ」
見透かした目で優しくエクボが言ってくる。
目を閉じて。

はぁ、と息を吐いて。
俺は覚悟を決めた。
「……みーくんは、昨日寝ただけの関係だ。あと依頼人なのも本当だ」
「昨日寝た、って」
モブの困惑した声に心が痛くなる。師匠のこんなただれた関係は知られたくなかった。
「一昨日は別の男と寝た。そのまた前はまた別の男、そのまた前は……そんな感じで、俺はワンナイトを繰り返してんだよ。恋愛はしてねぇ。セックスだけやってるんだ」
芹沢とモブが青い顔になって黙り込む。
「軽蔑するだろ？だから言いたくなかったんだよ」
「……なんで、そんなこと」
震える声でモブが言う。ごめんな、お前が好きになった師匠の正体がこんなクズで。
「……昔、恋愛で酷い失敗してな。それからもうそういうのはいいやってなったんだよ。でも溜まるもんは溜まるだろ？その発散をしてるだけだ」
「だったら」
モブが据わった目で俺を見る。
「僕たちでいいじゃないですか。色んな人としたいなら、日替わりで僕たちが抱いてあげますよ」
「……は？」
「俺様、色んな身体借りてきてやるぜ？あぶねーワンナイトなんてやめて、俺たちとヤればいい」
こくこくと真剣に頷く芹沢に血の気が引く。
「絶対ダメだ」
大きな声が出てしまった。
「お前ら俺が好きなんだろ、そんな、そんな気持ちを利用するようなこと、俺は絶対したくない」
「利用だなんて、そんな」
「俺はセックスできれば誰でもいいんだよ！！」
「じゃあ僕たちでいいじゃないですか」

「だからこそ、身体目当てにお前らとは絶対寝たくねぇ！！」
はぁはぁと息が上がる。
「俺はっ、お前らにっ、モブに、エクボにっ、芹沢にっ！！幸せにっ、なって欲しいんだよ！！」
叫ばせんな、ばか。
「本当に大事なんだ。お前らの幸せを願わない日なんてねぇんだよ、俺には。俺なんて抱いてる場合じゃねぇだろ、ちゃんと恋しろ、馬鹿！！」
そんでさ、彼女作ってさ、結婚とかしてさ、幸せな家庭とか作れんじゃんか、お前ら。
精子あるんだからさぁ！！！！
大事にしろよ、そのチンポ！！！！
「──恋はしてますし、僕は、たとえ性欲処理でも、師匠を抱けたら幸せですよ」
モブの真剣な声にため息が出る。
持ってるやつってのはよ。
分からないものだよな。
「俺はお前に気は無いよ」
「──本当に？」
夜空みたいな瞳に見つめられてドキっとする。
「無い」
憮然とした顔でモブが黙る。
「しかしよぉ、霊幻。お前また今日も男漁りに行って、誰かに抱かれるんだろ？」
「みーくん、も、また今夜、って言ってましたよね」
「正直、嫉妬で気が狂いそうですよ」
「……もう、ワンナイトは止めるよ。お前らにバレたし、潮時だろ」
もう、こう言わないとこの場は収まらないだろう。
「これでいいだろ？心配かけたな」
「……ホントですか？」
「ホントホント」
「みーくんとの約束は？」

「電話して断りゃいい話だ」
「……みーくんに電話番号教えてるんですね」
芹沢の追求にひくり、とほほが引き攣る。しつけぇぞ。
「依頼人だからな」
「霊幻、ホントに止めれると思ってんのか？お前」
エクボに言われて、は？と声が出る。
「ニンフォマニア……色情狂だろ、お前」
「はい？」
「セックスの頻度が高すぎるんだよ。それだけやってりゃ立派な病気だぜ、ソレ」
「しっつれーだな、お前。ヒトを勝手に病気にすんなよ」
「まあ、お前がその肌を他の男に預けないなら溜飲は下げてやるよ。だけど霊幻、もしそれが嘘なら、」
チカっ、とエクボの目が禍々しく緑に光る。
「それなりに覚悟はした方がいいと思うぜ？俺たちだって、幸せになりたいんでな──」
「は、は……」
乾いた笑いしか出ない。
まあいい。
これでこの話は終わりだし。

場所を変えてしまえば、まずバレないだろう。

我慢できるかよ。こんな気持ちよくてスッキリするストレス発散法。なんで他人にとやかく言われなくちゃならないんだっての。
「お兄さん、ネコ？」

隣町の発展場になってるバーで決まったカクテルを舐めていたら、
中々良さそうな男が隣りに座ってきた。
大柄で、手足が大きい、さっぱりとした短髪の男だ。
「そうだよ。どう、今晩？」
カクテルはノンアルコールにして貰えなかった。ふわふわするのが、ちょっと心地いい。
「いいね。早速ホテル行こうよ」
笑って立ちあがろうとする。
ぐわん、と視界が回った。
「大丈夫ですか！？」
抱き止めてくれた男に大丈夫と笑う。
あれ？
お兄さん、こんな色のスーツだっけ？
まあいいか、酔ってて見間違ったんだろう。

ホテルに入って。スーツをハンガーにかけながら脱いでいく。
「お兄さん、なんて呼んで欲しい？」
ふわふわとした気分のまま話しかける。
「……かつや」
「かつやかぁ。俺のことは新隆って呼んでくれていいよ」
？
なんだ、何か引っかかる。
「新隆さんっ」
でもかつやにキスされて違和感がどうでもよくなる。
「んぁっ……、ふ、ぅんっ……」
情熱的なキスに、たじろいでしまう。
俺の全てを喰らいつくそうとするような、激しい舌使いだった。
「はぁっ……」
喉まで犯されて、息苦しくなる。
「ぁんっ！キスマーク付けんなよ、マナー違反だぞ！！」
次はぶちゅぶちゅと激しく首にキスし始めたかつやが、強く首筋を吸い上げた。
「すみません、たまらなくて」

ベロリと首を舐め上げて口を離したかつやにベッドに押し倒される。
「綺麗だ……」
「んふ……ありがと」
褒められるのは悪い気はしない。
「かつやも、おっきくてカリが張ってて……かっこいいよ♡」
「……っ」
かつやがたまらない、という顔をする。
「ほぐしてるから、もう挿れてくれてもいいぞ♡おっきいのでガンガン突かれたい気分なんだよ」
「い、いいんですか？」
思わず舌なめずりする。
「そんなにガチガチにしてガマン汁ダラダラ垂らしてるの、一発早く出したいだろ？」
「……っす」
かつやがなれない手つきでコンドームを嵌めようとするのが、じれったくて。
「つけてやるよ」
口で咥えてするするとフェラしながら着けてやる。
やっぱり、大きい。期待に生唾が出てくる。
「霊幻さん、挿れますね」
「うんっ♡」
……あれ？なんだろ、このいわかん……
「あぁっ♡」
ずぶ、と大きな塊が入ってきて、思考なんて霧散した。
おっきいっ♡♡かたいっ♡♡
「もっとぉっ♡♡」
「……っ、霊幻さん、気持ちいいですか？」
「きもちいっ♡♡かつやのおちんちん、さいこうっ♡♡」
「……っ、嬉しいです」
ず、ずぶ、と気遣う挿れる動きがじれったくて、だいしゅきホールドをかつやにキメる。
「あぁ……っ♡」

ずどん、と奥まで一気に入ってきて、甘イキする。巨根だから、射精しにくい。別に構わない、気持ちいいなら、なんでも……♡
「愛してます……好きです、霊幻さん」
ぐしゃぐしゃに泣いてリップサービスをするかつやに笑う。
「いいねぇ、盛り上がるじゃんっ♡俺も好きだよ、かつや♡♡……ぁんっ！」
かつやが激しくピストンし始めて翻弄される。
「かつやぁっ♡イイっ♡♡もっと犯してぇっ♡♡ああっ、あっ♡」
思わずかつやの背中に爪を立ててしまって、慌てて手を離す。
「ごめっ♡ごめんっ♡♡」
ゆさゆさ揺さぶられてじんじんと快感に追い詰められながら謝る。
「いいですよ、気にしないでください、霊幻さん」
かつやからポタポタ落ちてくる汗が気持ちいい。
「優しいっ♡♡かつやのこと、結構好きかもっ♡♡」
「かも、じゃなくてっ、好きになって、くださいよっ」
あ、あ、イク、すごっ、深いの、くるっ、
「好きぃっ♡好き……かつやのチンポ大好きぃっ♡♡」
〜〜〜〜〜〜〜っ♡♡
身体を縮めて、ビクンビクンと跳ねながらメスイキする。
気持ちいい……♡
「あっ♡あっ♡また、イくっ♡♡」
ズンズンまだイッた余韻で引き攣れる媚肉を引き裂いて続けられるピストンに悲鳴みたいな声が漏れる。
「好きなだけイッて下さいよ。俺はバリア張ってイかないようにしますから」
「何っ♡それぇっ♡」
ぐい、とかつやの肩を引いて、はむ、と耳たぶを唇ではさむ。
「かつやもぉ……♡いっしょに、イこ♡」
ぶるりと震えて、かつやが俺の中で出す。
「いっぱいでたぁ……っ♡」
精液の熱さに酔いしれながら、快感に追い詰められる。
「あ、ぁあ……っ♡」
小さい波が大きなうねりに変わって、全身でソレに呑まれる。あち

こちの神経が焼き切れそう。
はー、やっぱデカマラ最高だわ。
「破壊力ヤバすぎでしょ……」
絶頂に喘ぐ俺を見下ろしながら、頭の血管が切れそうな顔でかつやが言う。
「もっかい、いいですか」
コンドームに苦戦しながら言ってくるので、手伝ってやる。
「いいよぉ、でもバックがらくだからこっちな……っあん♡」
背中に覆いかぶさったかつやに首筋や背中を舐められながらガンガン突かれる。
「さいこうっ♡イイっ♡はぁんっ♡♡」
目の中にハートでも浮かんでんじゃねーか？はは、最高だ♡
何度イッたか分からないほど情熱的に責められた俺は。
いつもは１２時には帰るのに、うっかりそのまま寝てしまった。

※

「んあ……やばっ、時間！！」
朝の光に飛び起きる。
飛び起きようとして。
俺をがっちりと抱きしめる腕に阻まれる。
舌打ちしながら昨日の相手を起こそうとして。
「……は？」
凍りついた。
裸ですーすー寝ている見知らぬはずのその男は。
どう見ても、芹沢だった。
心臓が跳ね上がる。嘘だろ。そんなはずはない。なんでだ。
きっとこれは、芹沢によく似た、そんな男だったんだ。
俺はそっと男の腕から抜け出し、ラブホの清算をすませてその場からそそくさと逃げ出す。

アパートに戻って。
着替えて。

相談所に行く。

しばらくすると芹沢が出勤してきて。
「おはようございます」
いつもと変わらない態度にホッとする。
あれはやっぱり、そっくりさんだったのだ。まったく、紛らわしい。
「そう言えば、最近面白い漫画を読んだんですよ」
「へえ、どんなのだ？」
いつも通りの雑談。
「ライアーゲーム、っていうんですけど」
ひくり、と笑顔が引き攣る。
「登場人物がみんな嘘つきな話なんですよ」
「……へぇ」
すう、と芹沢が俺を指差す。
「嘘つき」
どっ、と汗をかく。
すすす、と芹沢が俺を指していた指を、自分自身に向ける。
「嘘つき」
芹沢の顔が見れない。
「……そんな話ですよ。面白いですよね」
「はは、は」

笑えねぇよ。

続